

同志社大学
2016 年度 卒業論文

論題：痩せ願望および体型不安を抱くものの対人的な認知の特徴
－AMOS を用いた共分散構造分析－

社会学部社会学科
学籍番号：19131018
氏名：細川 友香理
指導教員：立木 茂雄教授

(本文の総文字数：20,037 字)

要旨

論題：痩せ願望および体型不安を抱くものの対人的な認知の特徴
－AMOSを用いた共分散構造分析－

学籍番号：19131018

氏名：細川 友香理

自身のダイエット経験から、女性の痩身願望や体型・体重へのこだわりについて興味・疑問を抱くようになった。女性の痩せ願望や体重・体型へのこだわりを抱く要因について、これまで様々な研究がなされてきたが、それらの多くは自己意識や社会的要因について言及されたものがほとんどであり、対人を想定した個人の認知の特徴について研究されたものは数少ない。そこで本研究では、「痩せ願望を引き起こすと予想される、体型不安を抱きやすいものの対人的な認知の特徴を明らかにすること」を目的とした。

先行研究をもとに、「女性において、他者からの否定的評価への恐れ、内的他者意識、外的他者意識、社会規定的完全主義が高いものほど体型不安が強くなり、痩せ願望を喚起する」という仮説を立て、質問紙による調査・分析を行った。

得られた結果は「他者からの否定的評価への恐れ、外的他者意識の高いものほど体型不安が高まり、痩せ願望を引き起こす」というものであり、一部仮説を実証する結果となった。

[キーワード] 痩せ願望、体型不安、対人的な認知の特徴

目次

はじめに	1
1. 女性の痩身	1
1.1 女性の痩せの歴史	
1.2 現代の日本人女性の体型	
1.3 痩せ願望を引き起こす要因	
2. 体型不安と身体醜形懸念	4
2.1 今井克己ら（1994）の研究	
2.2 身体醜形懸念	
2.3 田中勝則・田山敦（2013）の研究	
3. 仮説	1
4. 調査方法	1
5. 分析結果	1
おわりに	1

はじめに

なぜ多くの女性は痩せることにこだわるのだろうか。現代の社会では、痩身であることがもてはやされるような風潮があり、特に男性よりも女性において、テレビや雑誌をはじめとする各種メディアでは、頻繁にダイエットの特集が組まれているのを散見する。厚生労働省による平成 26 年国民健康・栄養調査報告では、痩せの者（BMI<18.5kg/m²）の割合は男性 5%、女性 10.4%であり、平成 16 年の調査と比較すると、男性は 4.7%、女性は 9.8%であったことから、この 10 年間で、男性では変化が見られず、女性では有意に増加していることがわかる。

さらに、20 歳代の女性に限定すると、痩せの者の割合は 17.4%にのぼり、若い女性たちが痩身志向であることは明らかである。菅原健介・馬場安希ら（1998）による大学生を対象とした調査でも、男子学生に比べ女子学生は「ダイエット経験」や「痩せたいという意識」が高く、ダイエットの目的として「体型の維持」よりも「よりスリムになること」を重視しており、痩身への顕著なこだわりが示されている。実際に、筆者の周りの女性たちも、標準体型あるいは細身であるのにもかかわらず、ダイエットをしていたり、自身を「太っている」と認識している者は少なくない。そして、筆者自身も、15 歳の頃に 10 キロ以上のダイエットを経験しており、平均体重になった今もなお、体型・体重への執着や、太ることへの恐れを抱きながら日々生活している。

これまで、女性の痩身について数多くの研究がなされてきた。CiNii Articles で「痩身願望」「女」のキーワードで検索したところ、59 件の論文がヒットした。それらの多くは、摂食障害や食行動異常に関連するもの、「マスメディアおよび友人や家族などの身近な他者からの影響」といった外的要因を検討したもの、自尊感情や自己意識に焦点をあてた個人内心理要因について取り上げたものなどがほとんどである。今井克己ら（1994）は、青期女子の痩せ志向は、他人の目を気にした自己の体型に対する不安が大きな要因であると指摘し、痩身願望と体型不安の密接な関係を提言している。

ここで筆者は、痩せ願望や体型不安はある種の強迫観念と捉えることができるのではないかと、という考えが浮かんだ。そして、身体に纏わる強迫観念について調べたところ、「身体醜形障害」という精神疾患に辿りついた。さらに、身体醜形障害の症状には、「身体醜形懸念」とよばれる症状があり、身体醜形懸念とは、容姿についての欠陥への過剰な心配や強いとらわれなどを指す。そこには、自分の身体を発端とする恐怖感情という点で、体型不安との間に共通性が見出せるのではないだろうか。田中勝則ら（2011）によると、高い身体醜形懸念を有する大学生の対人的な認知の特徴として、「他者からの否定的評価への恐れ（Fear of Negative Evaluation ; FNE）」、「外的他者意識」「社会規定的完全主義」が高く、女性に限定すると前述の 4 つに加え「内的他者意識」も高くなることが明らかとなっている。

以上より、体型不安および痩せ願望において、対人的な認知の特徴について身体醜形懸念と同様の結果が得られるのではないかと、という仮説が生まれた。同様な結果が得られるということは、過度に体型不安や痩せ願望を抱く女性たちに対して、態度や意識の改善するアプローチの手掛かりが得られる可能性がある。そこで、本研究では「他者からの否定的評価への恐れ、内的他者意識、外的他者意識、社会規定的完全主義が高い女性ほど、体

型不安が高く、痩せ願望を引き起こす」というリサーチクエスチョンを立て、研究調査を行った。本論文の構成は以下のとおりである。第1章では、女性の痩せの歴史と現状について説明したのち、痩せ願望との関連について心理的諸要因の観点から、これまでの先行研究の詳細をみていく。第2章では、体型不安および本研究の研究モデルとなった田中ら（2011）の身体醜形懸念についての先行研究を詳しく紹介する。第3章では、本研究の仮説について、その枠組みと根拠について解説する。第4章では、今回の調査の対象者・時期・調査方法・内容について説明する。第5章では、得られた結果について分析・考察する。おわりに、結果の考察と調査の反省点を述べ、論文の締めくくりとする。

1 女性の痩身

第1章では、女性の痩せの歴史や、現代の女性の体型の現状、痩せ願望にまつわる先行研究を詳しくみていく。女性の痩せを取り巻く現象についての理解を深めることで、今まで研究されてこなかった新たな研究の切り口を発見することを目的とする。

1.1 女性の痩せの歴史

「女性の魅力的な体型＝痩せた体型」という通念は、一体いつ、どこから始まったのだろうか。石垣亨（2015）は、女性の身体美の基本は、すでに紀元前から細い身体であった可能性を指摘している。Dominique Paquet（1999）によると、当時、結婚前の女性にとって肥満は大敵であったようである。紀元前2世紀のローマの喜劇作家であるテレンティウスが「結婚前の娘が堂々たる体格の運動選手に見えぬよう、食事の量を制限させた」という記述が残っており、これはダイエット（食事制限）の記録の最初ではないかと思われる。また Paquet（1999）は、

中世になると、美しい女性とは、ほっそりした体つきで、きつく帯を締めている。丸く小さな乳房は引き締まって形よく、胸から下は細くすらりとして、小さなヒップ、くびれた腰、ふくよかな腹部がさらに魅力を引き立てている。もともと、15世紀になると、肉付きのよい腰や、むっちりとした太腿が好まれるようになるが、これはおそらく美の基準が若い女性から成熟した女性へ移行したことを物語っているであろう

と述べている。痩身このような中世における女性の体型については、Georges Vigarello（2012）も同様に論じている。Vigarelloによると、女性の体型を表現した12世紀の記述には、12世紀末にピカルディの詩人によって書かれた短い武勲詩である「エリー・ドゥ・サン＝ジル」に出てくる、若い娘の「先細りの柳腰、細い胴」や、同時期のフランスの武勲詩である「ラウル・ドゥ・カンブレ」に登場する、ベアトリクス（オランダ女王）の「引き締まった乳房、白いからだ、澄んだまなざし」があり、中世の女性の体型美は、細く引き締まった胴体であるといえるだろう。

Vigarello（2012）はさらに、16世紀になると、肉付きが強調され、外見はふくらみを帯び、局面は存在感を増すとされると指摘している。16世紀には、「肉付きのいい」という、「痩せ」と「肥満」の中間の、バランスのとれた状態を表す表現が多用されることが伝えられている。いわゆるここでは、肉づきの悪いものから良いものへ、からだつきの貧弱なものから豊かなものへと等級が変化していると考察されていることから、現在流布している魅力的な体型とは逆の価値観となり、これらの記述を基にすると、現在の男女の中性的な体型は12世紀に逆戻りしたような感じもあるという。

したがって、ヨーロッパにおいてはルネッサンス（文芸復興）期まで細い女性が理想とされ、ルネッサンス期から近代までは、肉感的な女性が理想とされているのではないかと考えられる。ルネッサンスの特徴は、ギリシャおよびローマの文芸復興であり、古代ギリシャにおけるピタゴラス的な調和等の考えでは身体美は、プロポーション（比率）とフォルム（形）の調和であることから、女性の魅力的な体型を示す客観的な指標であるウェス

ト／ヒップ比 (waisto-to-hip ratio : WHR) 等のプロポーションの考えはこの時代から発展し、その後コルセット等による過度にデフォルメした身体美観に発展したと考えられる。

バロック期には、自然の復権により飾らないあるがままの身体が受け入れられ始められるという。Bennett & Gurin (1982) は、この時代の女性の理想的な体型について、以下のように述べている。

十五世紀以来、西欧社会は女性の三つの体型を理想としてきた。十七世紀までは腹部が中心のむしろふっくらとした女性が尊敬された。次いで、この「生殖的な」形は、細いウエストで豊かな胸と丸い尻を引き立たせている「砂時計」モデルに置き換わった。十九世紀の終わりに起こったこの変化は今日もみることができる。一般的に言えば、男性の好みは今も母性的な体であるが、二十世紀の女性は多産と母性を象徴的に強調したものを拒み、次第に脂肪のない、ほとんど「筒形の」体型を理想とするようになった。

このことから、15世紀からの20世紀まではふくよかで豊満な身体が理想とされていたが、そののち、ふたたび15世紀以前の瘦身傾向に逆戻りしたことがわかる。

女性の体型は、中世では社会的階級を示す手段としても用いられている。Dürer (十五世紀～十六世紀のドイツの画家) は、著書『人体均衡論四書』の中で人間の理想的なプロポーションを数値によって決定しようと試みた人物であるが、彼は「村娘」の姿を丸々とした輪郭で、「か細い」女をほっそりした輪郭で描いて両者を区別していたことが伝えられている (Vigarello 2012)。さらに Vigarello は、丸々とした姿形 (締まりのない肉体) は、身なりに無頓着な民衆を表し、か細いかたち (引き締まった肉体) は、洗練を表すとしている。このような絵画表現は、Bruegel (十六世紀のフランドルの画家) も農村の風俗画の中で農婦を丸々とした肩、ゆるやかな衣服に包まれた、重そうなかからだで表現しているに対して、「姦通の女」を描いた作中では、高貴な家の出の、ベルトできつく締め付けられた、ウエストの細い婦人が描かれているという (Vigarello 2012)。Ambroise Paré (十六世紀のフランスの外科医) は、「ぶくぶく太って、淫売顔負けの大きな尻をした女」、「ぶくぶく太った田舎っぺ」、「肉がだぶつき、尻の大きな肥満女」という表現を用いており、いわゆるこれらは、社会的階級または生活環境が体型に反映していることを示しており、別の見方をすれば、体型によってその人の社会階級を判定していることとなる。このような表現は、十七世紀にも持ち込まれ、ボスの絵画では、「腹をすかした人々に食べ物を与える」の中で、庶民を鈍重な体型に対して貴族をほっそりと垂直なイメージで描写しており、施す側と施される側という社会的な差異を体型にも反映させて表現しているという (Vigarello 2012)。

一方で、17世紀の上流社会では、胸と胴体に注意深い視線が注がれるようになり、これを強調するコルセットの着用により女性のシルエットの社会的領域が決定的に分裂したとされている (Vigarello 2012)。この時代では、女性の体型の階級差は、「細さ」と「丸さ」もさることながら、「直線」と「たるみ」に移行する。ルイ14世がマントン夫人に、未来の王太子妃として嫁いでくるサヴォア公女の容姿について記載した内容は、「胴はとても美しく」とあるように、ウエストについてのみにしか言及していないことから、17世紀末の貴族世界が期待する体型は、ウエストに視線が向けられることとなる (Vigarello 2012)。

これが、近代において貴族階級が減少するにつれて上流階級と区別の意味を持つこととなる。

Vandereychan & Deth (1994) は、十八世紀以降の食糧事情の好転により上流と中産階級との間に食事の量的な差が無くなるに連れて上流階級は、味覚（美食）に階級区別を見だし、これと並行して女性が痩身であることが下層との区別となる新しい手段となったと考えている。いわゆる、十八世紀から十九世紀の西欧における社会的な階級の区別にも女性の体型が用いられたこととなる。

しかし、現代社会においても女性の魅力的な身体の指標は、経済および保健衛生環境により異なった結果を示すとされていたことから、世界全体が同一の方向に向かっているわけではない。いわゆる、経済および保健衛生環境が不満足な地域では太った女性が好まれ、逆の環境では痩せた女性が好まれている。ただし、現在では、肥満が世界的に進行していることは、世界の多くの地域の食糧事情が好転していること示しており、多くの国や地域で痩せた女性の体型が理想となると予想される（石垣 2015）。

1.2 現代の日本人女性の体型

厚生労働省の「平成 26 年国民健康・栄養調査報告」によると、2014 年の 18 歳から 22 歳までの日本人女性の平均身長は 157.2cm であり、平均体重は 50.0kg（妊婦は除外）であった。この数値から得られる平均 BMI（body mass index 体格指数：体重／身長²）は 20.2 であり、10 年前の 2004 年の平均値は 20.5 であったことから、若い女性の痩せ志向は年々強まっていることがわかる。また、日本肥満学会は BMI の判定基準を、18.5 未満を「痩せ」、18.5 から 25 未満を普通、25 以上を肥満と定義していることから、20.2 という数値は、「痩せ気味」に該当し、さらにこの傾向が強まれば、骨密度の低下や無月経をはじめとする、健康面に支障をきたす恐れがあるといわれている。

図 1 は厚生労働省が調査した 2014 年のやせの者 (BMI < 18.5 kg/m²) の割合 (20 歳以上、性・年齢階級別) である。20 歳から 29 歳の女性の 17.4%、およそ 5 人に 1 人が BMI < 18.5 kg/m² の「痩せ」に分類される。繰り返しになるが、男性よりも女性、さらに女性の中でも 20 歳から 29 歳の女子青年の痩せの割合は、それより高齢の女性と比較すると、有意に高いといえるだろう。

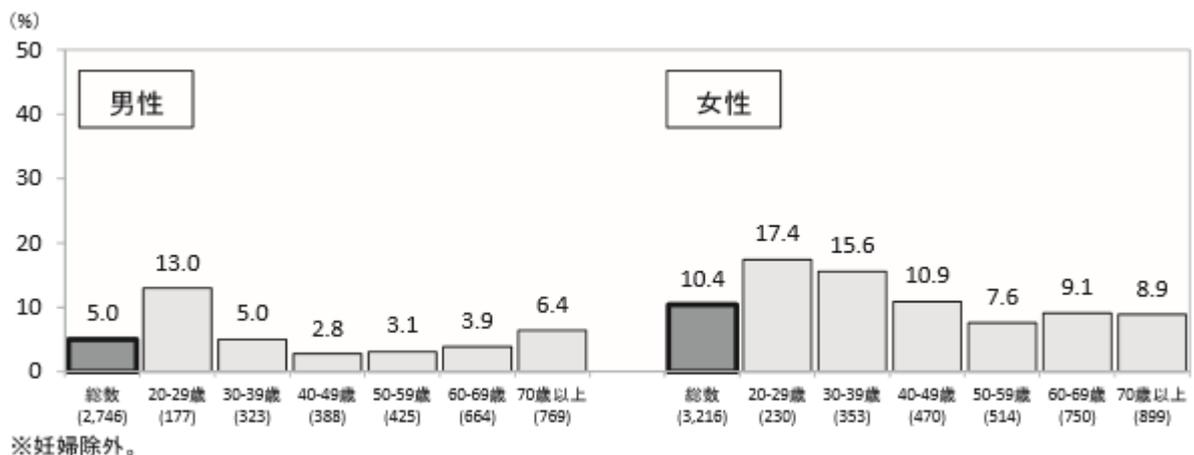


図 1 やせの者 (BMI < 18.5 kg/m²) の割合 (20 歳以上、性・年齢階級別)

「出典：厚生労働省 平成 26 年国民健康栄養調査」

では、青年期の女性は自身の体型について、実際どのように認識しているのだろうか。半藤保・川嶋友子（2009）が18歳から23歳の女子大生293人を対象に、「自分の体型をどう思っているか」について調査した研究がある。調査の対象者293人のうち、有効回答を得られた241名をBMIの判定によって痩せ（低体重）群・普通（標準体重）群・肥満群の3つに分類したところ、痩せ群は40人（全体の16.6%）、普通群は185人（全体の77.0%）、肥満群は16人（6.6%）であった。それぞれの群での体型についての自己認識は、痩せ群は痩せすぎと自覚している者が4人（痩せ群の10.0%）、少し痩せている10人を合わせると14人（痩せ群の35.0%）であった。しかし、BMI値上痩せていても丁度よいと回答したものが17人（痩せ群の42.5%）であり、痩せを自覚しないどころか、逆に痩せ群に属しながら少し太っている8人や、なお太り過ぎ1人を加えた9人（痩せ群の22.5%）は太っていると認識していた。

また、自身の体型に関する満足度では、普通群185人のうち、満足している者は18人（普通群の9.7%）のみであり、あまり満足ではないあるいは不満足が146人（普通群の79%）にもおよび、痩せ願望の実態を示唆するものとなっている。

また、実測値BMI値が痩せている（40人）にもかかわらず、さらに痩せたいものは13人（痩せ群の32.5%）に達し、太りたいはわずか2人（痩せ群の5.0%）、今のままでよいは25人（痩せ群の62.5%）いた。ところが、実測値BMIが普通群の185人については、痩せたいが170人（92.4%）にも達し、普通群にあっても痩せたいと願う者の多いことが如実に示された。肥満群では6人全員が痩せたいという願望を持っていた。また、調査対象者241人中、199人（82.9%）が痩せたいという願望を抱き、今のままでよい38人（15.8%）にしか過ぎなかった。太りたいは僅か3人（1.2%）と限りなくゼロに近い数字を示した。

対象者が理想とするBMI値の平均は、痩せ群は17.5、普通群は19.0、肥満群は21.0であり、実測値BMIと比較すると、普通群ではBMI値1.0の減少、肥満群ではBMI値5.8の減少を理想としていた。ただし、痩せ群のみBMI値1.0の増加を理想としていた。

このように、普通群に属していても多くの者が痩せ願望を抱いている理由としては、普通群の分類が「BMI18.5～25以下」とその範囲が実に幅広いためではないかと筆者は考える。BMI値25という数値は、痩せ志向が社会的風潮としてある現代においては、客観的に肥満と認識する人が多いのではないだろうか。また、日本ではBMI値が22のときの体重は標準体重または適正体重と呼ばれ、病気にもっともかかりにくい体型とされている。にもかかわらず、健康よりも自己の容姿への関心が高まる20代前後の女性にとって、BMI値22という体型は、ふくよかな印象を与えてしまうと考えられる。つまり、医学上は健康であり、普通に分類される体型であっても、若い女性たちが考える「スリムで魅力的な身体」とそれは全くの別物であることがうかがえる。

1.3 痩せ願望を引き起こす要因

では、実際にどのような要因が痩せ願望を喚起するのだろうか。痩せ願望に関する研究は、これまで長きにわたり様々な切り口から研究がなされてきた。それらのうちから、本研究では心理的側面に焦点を当てたものに注目し、検討していく。

馬場・菅原の研究（2000）によると、痩身願望は以下の3つのルートを通じて高められるという。第1のルートは、身体的な肥満から痩身願望へ直接至るルートである。これは心理的な要因を媒介していないことから、純粹に運動能力や健康上の理由から痩せたいと

思う過程である。第2のルートは、自己顕示欲求から発する瘦身願望である。「女性としての魅力をアピールしたい」という自己顕示性の高さにBMIが高いという要因が加わる時、瘦身が顕示性を満足させるための手段としての意味が強まり、「痩せれば今より良いことがある」といった瘦身によるメリット感が高まって瘦身願望に結び付くという。第3のルートは、自己不全感から発する瘦身願望である。自尊感情が低く、日常的な空虚感が高い個人に、BMIが高いという要因が加わったとき、そうした自己不全感の原因を自分の太っている身体に帰属し、「今の体型のせいで幸せになれない」といったデメリット感を生じさせるという。そして、このデメリット感から瘦身のメリット感が生じ、瘦身願望に至るといふ経路である。すなわち、上記のような、女性たちの複雑で多様な欲求を満たすために「瘦身」という単純な手段が用いられるのである。

また、山蔦圭輔（2010）は、自己意識の観点から痩せ願望について検討している。山蔦は、「同様の社会に存在するすべての者が同程度に痩せ願望を喚起し、食行動の問題を発現・維持するとは限らず、痩せ願望を喚起する個人内心理要因について」研究する必要性を訴えている。山蔦によると、「瘦身が美しい」といった社会的風潮を背景に、痩せ願望を持ちながら高い公的自己意識を有し、他者から評価され得る身体のおよよかさに意識が向いた場合、主観的な理想体型（瘦身体）と自信の体型のとの比較を行うことが予想されるという。なお、公的自己意識とは、他者から観察可能な自己（容姿や体型、振る舞いなど）に対する意識傾向であり、公的自己意識が高い場合、他者評価に対する感性が高く、自身が持つ基準（この基準とは理想的で現実には追いつくことが難しいことが多い）と他者評価とを比較し、それらの中に乖離が生じる場合、自己否定感が喚起されるという。ようするに、痩せ願望は公的自己意識と関連しており、公的自己意識ひいては自己否定感の強さによって痩せ願望が喚起される度合いが異なるのである。

以上が、痩せ願望を喚起する要因について、主に心理的諸要因の観点から検討した先行研究である。しかし、これらの研究は、あくまで個々人の内面的な傾向や欲求で完結しており、高い痩せ願望を有するものの対人的な心理傾向を考察するには至っていないように思われる。そのため、本研究では、他者の存在や他者との関わり合いを想定した心理諸要因を中心に、痩せ願望との関連を明らかにしたいと思う。

2 体型不安と身体醜形懸念

第2章では、痩せ願望と強い関連性が報告されている体型不安について、先行研究を詳しく取り上げていく。さらに、身体にまつわる精神疾患の症状である「身体醜形懸念」について、その定義と症状の特徴を説明し、本研究のモデルとなった先行研究を紹介する。

体型不安とは、自らの体型と関係している対人関係の評価の存在、または、対人関係の評価が自らの体型と関係しているという予想の結果としておこる社会的不安の1つのタイプと定義されている (Hart ら 1989)。

2.1 今井克己ら (1994) の研究

この研究では、「青年期女子の“やせ”に関する健康科学的研究の第一報」として、「自己体型の認識を検討し、“やせ”を志向しているのか、その実態を明らかにすることによって、正しい科学的根拠に基づいた健康処方のための基礎資料を得ること」を目的とし調査を行っている。調査対象者は、福岡市にある K 国立大学、N 私立大学、F 私立大学の 18 歳から 22 歳 (平均年齢 19.8 ± 1.1) の女子大学生 261 人であり、それぞれの大学で講義中にアンケート調査が実施された。調査時期は 1992 年 10 月から 12 月である。

調査内容は、現在の身長と体重に関する認識調査、理想の身長・体重調査、体重調節志向調査および体型不安調査である。体重の自己評価は、「やせだと思う」、「普通だと思う」、「少し太っていると思う」、「太り過ぎだと思う」の 4 群に分類しており、体重の調整志向は、「太りたい」、「痩せたい」、「このままでよい」の 3 群に分類している。体型不安度は、Hart らの Social Physique Anxiety Scale (SPAS) の 12 項目を日本語に訳して使用し、高い不安度 4 点から低い不安度 0 点までの 5 段階尺度で評価している。統計的な有意さの検定は、Student の t テストで実施し、 $p < 0.05$ 以下を有意水準としている。

以下は、今井らの調査結果であり、本研究に関連のある箇所のみを抜粋したものである。対象者の平均身長と平均体重はそれぞれ 158.3cm と 50.7kg であり、BMI の平均値は 20.2 であった。対象者のうち、自身を「やせだと思う」者はわずか 6.5% にすぎず、「普通だと思う」者は 35.2% であった。しかし、「少し太っていると思う」者が 39.8%、「太り過ぎだと思う」者が 18.4% で、自己の体重を肥満傾向にあると評価した者が 58.2% もみられた。体重の調整志向については、「やせたい」志向が圧倒的に多く 194 人 (74.3%) であり、「このままでよい」61 人 (23.4%)、逆に「太りたい」志向はわずか 6 人 (2.3%) に過ぎなかった。

このような自己の体重を過大評価する傾向と、顕著な痩せ志向については、約 15 年後の研究である半藤保・川嶋友子 (2009) の調査においても同様の結果が得られていることから、ここ数十年で青年期女性の体型に関する風潮は変化していないことが明らかとなった。

図 2 は SPAS による体型不安度を体重の調整志向別にみたものである。総合得点の全体平均値は 34.1 であり、この得点に対して「やせたい」群の平均得点 36.6 は有意に高く、「このままでよい」群の得点 26.8 は有意に低い値であった。各尺度別得点のプロフィールは 3 群とも非常に類似はしているが、全尺度とも「やせたい」群の得点が最も高く、「太りたい」と「このままでよい」群における得点の高低は尺度によって異なっていた。

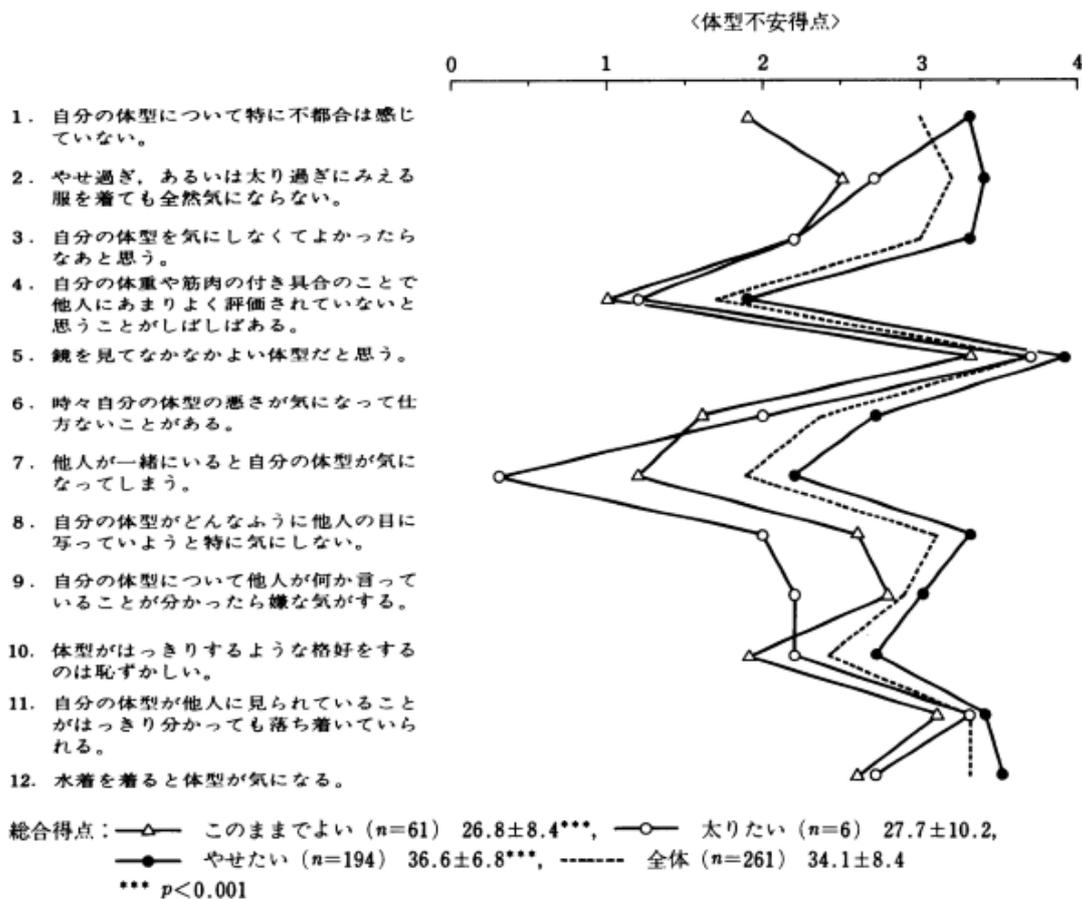


図2 SPASによる体重の調整志向別の体型不安度

「出典：今井克己ら（1994）」

以上の結果をまとめると、青年期の女性は自身の体型を過大評価し、多くの者が実際の体型にかかわらず痩せ志向であること、そして痩せ志向ものほど体型不安度が高いということになる。今井らは、「青年期の痩せ志向は、マスメディアに誘発されたファッション性を基礎にした自己の身体への捕らわれ、すなわち他人の目を気にした自己の体型に対する不安が大きな要因であろう」（1994）と見解を述べている。

2.2 身体醜形懸念

次に、自己の身体への意識にまつわるである精神疾患、身体醜形障害の症状である「身体醜形懸念」について説明する。

身体醜形懸念とは、精神疾患である身体醜形障害の症状の1つである。身体醜形障害とは、自己の容姿における想像上の欠陥への没頭、もしくはささいな身体の欠点に対してその個人が著しい懸念を抱いている状態とされ、結果として日常場面における回避的行動や確認行動が増加すること、およびこれに伴う社会機能不全が生じることがその特徴とされており（American Psychiatric Association 1994）、強い抑うつ状態を伴うことが指摘されている（Gunstad J, Phillips KA 2003）。Littleton ら（2005）は、身体醜形障害のうち、容姿についての欠陥への過剰な心配や強いとらわれ、過度の確認行動や容姿についての欠陥をカムフラージュするための行動、社会的な場面からの回避や安全を求める行動を身体

醜形懸念として扱うことを提唱している。

身体醜形懸念は青年期に高まることが知られており、さらに身体不満足感との間に正の相関があることが報告されている（田中 2012）。身体不満足感は男性よりも女性のほうが高い傾向にあり、不満を感じる身体部位も女性のほうが多い（田中 2012）。

このように、身体醜形懸念が身体不満足感との間に正の相関がある点や、身体醜形懸念の性別による傾向の差異が生じている点は、痩せ願望や体型不安と共通項としてとらえることができる。したがって、身体醜形懸念について報告されている調査結果は、痩せ願望及び体型不安にも同様の結果が得られる可能性がある。

2.3 田中勝則・田山敦（2013）の研究

本研究では、田中・田山ら（2013）の研究をもとに仮説モデルの構築を行った。そのため、先に田中・田山の研究内容について触れておく。この研究では、患者への相談アクセシビリティ向上、介入技法の改善のために、高い身体醜形懸念を有する大学生の対人的な認知の特徴を検討することを目的としている。対象者は九州地方の4年制大学に在籍する大学生男女285人（男性120人、平均年齢19.56歳；女性165人、平均年齢18.81歳）であり、大学の講義時間を利用し無記名式で調査冊子を配布、講義時間内に回収された。調査内容は、デモグラフィック変数として性別および年齢の質問、以下の4つの尺度である。(1) 日本語版 Body Image Concern Inventory（田中ら 2011）、(2) 短縮版他者からの否定的評価への恐れ；Short Fear of Negative Evaluation Scale（笹川智子ら 2004）(3) 他者意識尺度（辻平治郎 1993）、(4) 日本語版 Multidimensional Perfection Scale（大谷佳子・桜井茂男 1995）、それぞれの尺度の詳細については、第3章の研究方法にて記述する。

調査結果は以下のとおりである。身体醜形懸念、他者からの否定的評価への恐れ、内的他者意識、外的他者意識、社会規定的完全主義のそれぞれに関して、男女間で差異が見られるか否かを検討するために、各尺度得点の平均値についてt検定を行っている。従属変数が5つ存在することから、Bonferroniの調整を行い、危機率を1%としている。その結果、身体醜形懸念、他者からの否定的評価への恐れ、内的他者意識について、女性のほうが男性よりも有意に高い得点を示した。外的他者意識、社会規定的完全主義については、男女間で有意な得点差を認めなかった。

つぎに、高い身体醜形懸念を有する者の対人的な認知の特徴を明らかにするために、身体醜形懸念を得点の高い順から High 群、Middle 群、Low 群に群分けして独立変数とし、他者からの否定的評価への恐れ、内的他者意識、外的他者意識、社会規定的完全主義を従属変数として、男女別で多変量分散分析が行われた。分析結果を要約すると、男女共に、身体醜形懸念が高い群において、他者からの否定的評価への恐れ、外的他者意識、社会規定的完全主義が高い傾向にあることが示された。また、身体醜形懸念が高い群のなかでも、内的他者意識は女性のみ高い傾向があることが示された。

以上が田中らの研究報告であるが、ここで筆者はある疑問が浮かんだ。田中らは身体醜形懸念を独立変数、対人的な認知の特徴4つを従属変数としたが、その因果関係は逆転している可能性がある。いいかえると、「対人的な認知の特徴4つの傾向が強いものほど、身体醜形懸念を発症しやすい」という因果関係こそが正確なのではないか、という疑問である。すなわち、独立変数に設定すべきは対人的な認知の特徴4つであり、従属変数に設

定すべきは身体醜形懸念であると筆者は考える。

3 仮説

第2章の先行研究をふまえて、本研究では、対人的な認知の特徴4つを要因とし、身体醜形懸念を体型不安に置き換えて仮説立てを行った。本研究で筆者がたてた仮説は、「女性において、他者からの否定的評価への恐れ、内的他者意識、外的他者意識、社会規定的完全主義が強いほど体型不安が強くなり、痩せ願望を引き起こす」であり、図3に表すと以下のようになる。

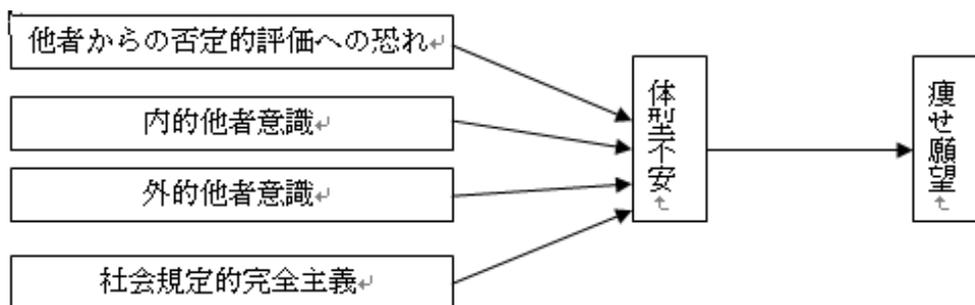


図3 本研究の仮説モデル

仮説について詳しく説明すると、まず条件を女性に限定した理由としては、体型不安や痩せ願望は、男性よりも女性において強い傾向にあることは、これまで多くの先行研究で明らかとなっているためである（菅原・馬場 1998）。

つづいて、体型不安に影響を与えると想定した4要因に関してパスを想定するに至った根拠を記述する。まず、他者からの否定的評価への恐れに関してであるが、前川浩子（2005）によると、他者から体型に関して評価を受けた経験は、本人にとって重く受け止められる場合があるという。さらに前川は、同年代の仲間からからかい対象となった経験は、自分の体型や体重に否定的な認知をもたらす可能性を指摘している。そのような否定的な認知が恐怖心へと結びついた場合に、体型不安にフィードバックし、より体型不安を高めると考えられるため、他者からの否定的評価への恐れから体型不安のパスを想定した。

つぎに、内的他者意識に関してであるが、田中ら（2013）によると、身体醜形懸念が高い群では、他者が自分の容姿を否定的に評価しているのではないかと懸念を有している可能性が示唆されている。したがって、体型不安も身体醜形懸念と同様に、実際の評価の有無に関わらず、「他者が自己に対して望ましくない評価しているだろう」と思い巡らせる傾向が強いものほど体型不安が高まると考えたため、内的他者意識から体型不安へのパスを想定した。

つぎに、外的他者意識に関してであるが、勝野綾子ら（2010）によると、「太っている」「少し太っている」と自己評価する第一の理由として、若年女性の50%以上が「他の人と比べて」を挙げていた。さらに自分以外の情報（友人・雑誌のモデル・テレビのタレントなど）を基準とし、他人と比較した「見た目」を重視する傾向が認められている。したがって、外的他者意識が高いものほど、理想的な体型をした他者と現実の自己の体型を比較し、その乖離が生じた場合に、体型不安を抱く可能性があると考えられるため、外的他者意識から体型不安へのパスを想定した。

さいごに、社会規定的完全主義に関してであるが、「自分自身は完璧でなければならない」、「他人から自分は何事も完璧であるように求められている」などと感じる傾向の強いものほど、社会で理想的とされる体型（モデルやタレントなど）こそが価値があり、完璧で、自分もそのような体型に近づきたい、あるいはそのような体型でなければならないと思いつく可能性がある。その結果、体型不安を強く抱くと予想されるため、社会規定的完全主義から体型不安へのパスを想定した。

以上、筆者が本研究で立てた仮説の詳細である。この仮説を検証するために、次の章では調査・分析を進め、得られた結果を記述する。

4 研究方法について

3.1 調査対象者・時期

調査対象は、同志社大学および同志社女子大学の大学生らと、筆者のアルバイト勤務先の他大学の大学生である。質問紙の回収には2通りの方法を用いて行った。1通り目は、2016年10月11日に、立木教授が開講している家族社会学の講義時間を頂戴して質問紙を配布し、74票を回収した。2通り目は、無料のアンケート作成ツールである「google フォーム」を使用して、講義中に配布した質問紙と同様のアンケートをwebで作成した。webでの回答には回答期限を設け、2016年10月初旬から中旬にかけて実施した。対象者は、筆者の所属する同志社大学美術部の部員46名と、アルバイト先の大学生8名であり、スマートフォンで個別に連絡をして協力を得、54票を回収した。

調査全体の回収数は128票であり、そのうち回答に不備のみられた2票を除外した有効回答数は126票であった。なお、調査票の表紙には、調査の趣旨・得られたデータの使用目的・回答から個人が特定されたり個人情報漏洩する心配はないことを明記した。得られたデータはすべて、統計ソフトSPSS Ver.24で数値化して処理を行い、相関分析および重回帰分析を行ったのち、統計ソフトAMOS Ver.24で共分散構造分析を行った。

3.2 調査内容

本調査の質問紙には、田中・田山(2013)の先行研究を参考に、「他者からの否定的評価への恐れ」12項目、「内的他者意識」7項目、「外的他者意識」4項目、「社会規定的完全主義」5項目、「痩せ願望」11項目、「体型不安」12項目と、末尾に対象者の大学、性別、年齢、身長、体重の基本属性の設問を設けた。以下は各尺度の詳細である。

「他者からの否定評価への恐れ」の項目には、笹川智子ら(2004)による研究「他者からの否定的評価に対する社会的不安測定尺度(FNE)短縮版作成の試み - 項目反応理論による検討 -」より引用した。「他者からの否定的評価への恐れ」の尺度はWatson & Friend(1969)によって開発され、全30項目から構成される(項目例:「ほかの人が私の欠点に気づくのではないかとしばしば心配する」)。現在、社会不安研究で最も頻繁に用いられる測度のひとつである。日本版は石川利江ら(1992)によって標準化され、笹川ら(2004)によって、全12項目から構成される短縮版が開発された。その信頼性や臨床的妥当性についても確認がなされている(笹川2003)。

「内的他者意識」および「外的他者意識」に関する項目には、辻平治郎(1993)による著書『自己意識と他者意識』から引用した。他者意識とは、「他者の容姿容貌や一挙手一投足に注目し、表情や態度が何を意味しているかを気に向け、心のなかの思考や感情に思いをはせる」(辻1993)注意や関心、意識などを指す。他者意識の中でも、「内的他者意識」は他者の内面への関心にまつわる全7項目(項目例:「他人のちょっとした表情の変化でも見逃さない」)、「外的他者意識」は他者の外面への関心にまつわる全4項目(項目例:「人の外見に気を取られやすい」)で構成されており、いずれも十分な信頼性と妥当性があることが辻(1993)により報告されている。

「社会規定的完全主義」の項目は、煙山千尋と清水安夫(2009)による論文「大学生のperfectionismとメンタルヘルスとの関係 - 大学生版Perfectionism Scaleの作成及び集団適応効力感を媒介変数とした検討 -」から引用した。社会規定的完全主義とは、自己の行

動に関して、過度に完全性を求める傾向にあるパーソナリティ特性 **perfectionism** を構成する 3 つの下位尺度のうちの 1 つであり、特に、「他者から完全性を求められていると感じる」ものを指す。**Perfectionism Scale** は **Hewitt & Flett (1991)** によって開発され、大谷・桜井 (1995) によって日本語版が作成された。本研究では、大谷・桜井 (1995) が作成した項目をもとに、煙山・清水 (2009) が我が国の大学生の現状を考慮して作成した大学生版 **Perfectionism Scale** の下位尺度の中から「社会規定的完全主義」を引用した。全 5 項目 (項目例:「他者は、私が良い結果を出すのを当然だと思っている」) で構成されており、十分な信頼性と妥当性が煙山・清水 (2009) によって報告されている。

「痩せ願望」の項目には馬場・菅原 (2000) の研究「女子青年における痩身願望についての研究」より引用した。馬場らは痩せ願望を「自己の体重を減少させたり、体型をスリム化しようとする欲求で、食事制限、薬物、エステなど様々な痩身行動を動機づける心理的要因」と定義している。全 11 項目 (項目例:「もっと痩せたいという思いで頭がいっぱいだ」) から構成されており、十分な信頼性と妥当性が報告されている (馬場ら 2000)。

「体型不安」の項目には、**Hart, E. A.**ら (1989) によって開発された **Social Physique Anxiety Scale** の 12 項目を、今井克己ら (1994) らが邦訳し、「青年期女子の体型誤認と"やせ志向"の実態」の論文の中で使用したものを引用した (項目例:「自分の体型を気にしなくてよかったらなあと思う」)。尺度の妥当性は今井ら (1994) によって報告されている。

なお、本研究では質問紙の便宜上、各尺度における質問の回答はすべて「1 あてはまる」「2 どちらかといえばあてはまる」「3 どちらかといえばあてはまらない」「4 あてはまらない」の 4 件法に統一して回答を得た。

5 分析結果

第5章では、今回実施した質問紙調査によって得られたデータを分析し、結果をもとに考察していく。

5.1 対象者の属性

まず、対象者128名の基本属性について詳しくみていく。性別の内訳は、女性は85名、男性は41名、その他と回答したのは2名であった。女性がそれ以外の性別の約2倍の人数となった要因は、今回講義中に質問紙を配布した受講生は主に社会学部の学生であり、本学の社会学部の男女比は4:6であることから、女性が多く受講していたためであると考えられる。また、webアンケートを依頼した、筆者の所属する同志社大学美術部は7割が女子部員で構成されていることや、アルバイト先の従業員の9割が女性であったことなど、女性の割合が高い集団が標本となったことも要因として挙げられる。

対象者の身長の平均値は、女性は159.5cm、男性は172.3cm、であり、体重の平均値は、女性は50.5kg、男性は62.2kgであった。厚生省の平成26年の調査データと比較すると、女性の身長は+2.3cmであったが、その他の数値についてはおおよそ同値であった。

5.2 分析結果

「女性において、他者からの否定的評価への恐れ、内的他者意識、外的他者意識、社会規定的完全主義の4要因が、体型不安を媒介して、痩せ願望を引き起こす」といったモデルを構築するために、SPSSとAMOSを併用して段階的に分析を行った。

4要因の得点に関しては、「他者からの否定的評価への恐れ」は12点から48点の範囲、「内的他者意識」は7点から28点の範囲、「外的他者意識」は4点から16点の範囲、「社会規定的完全主義」は5点から20点の範囲を取る。「体型不安」は12点か48点の範囲、「痩せ願望」は11点から44点の範囲を取り、上記の尺度はすべて、得点が高いほど強い傾向を有することを意味する。それぞれの尺度の平均値と標準偏差を表1、表2に示した。

表1 変数の平均値（女性のみ）

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
他者からの否定的評価への恐れ	84	17.00	48.00	35.0000	7.14227
内的他者意識	85	9.00	28.00	20.5294	4.64345
外的他者意識	85	4.00	16.00	11.3529	2.88141
社会規定的完全主義	85	5.00	18.00	10.2471	2.92325
痩せ願望	85	11.00	42.00	24.4588	8.36312
体型不安	85	14.00	48.00	34.5059	6.73587

表 2 変数の平均値（女性以外）

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
他者からの否定的評価への恐れ	43	15.00	47.00	32.6744	8.53486
内的他者意識	42	10.00	28.00	19.3571	4.64769
外的他者意識	42	4.00	14.00	10.0714	2.61695
社会規定的完全主義	43	5.00	20.00	9.8605	3.07510
痩せ願望	43	11.00	38.00	16.1860	7.86268
体型不安	43	13.00	42.00	27.8837	7.04817

女性と女性以外の平均値を比較すると、すべての変数において女性のほうが高い点数であることが明らかになった。特に、痩せ願望は女性以外の平均値が 16.1860 であるのに対し、女性では 24.4588 であり、これまで数多くの先行研究で指摘されてきたように、女性のほうが有意に痩せ願望が強いという結果が今回の研究でも証明された。同様に、体系不安においても女性以外の平均値が 27.8837 であるのに対し、女性は 34.5059 であり、有意に高い結果となった。以上の結果から、本研究においても、多くの女性が自身の体型に満足しておらず、否定的な感情を持っていることが読み取れた。

つぎに、各変数間で相関分析を行い、4 要因と体型不安および痩せ願望との関連を検討した。4 要因の平均値と標準偏差および 2 変数間の相関係数を表 3 に示す。

表 3 従属変数と独立変数の相関係数、平均値、標準偏差

	体型不安	痩せ願望	他者からの否定的評価への恐れ	内的他者意識	外的他者意識	社会規定的完全主義	平均	標準偏差
体型不安	1	.676**	.352**	.307**	.414**	-0.079	32.2813	7.50321
痩せ願望	.676**	1	.266**	.238**	.325**	-0.039	21.6797	9.06054
他者からの否定的評価	.352**	.266**	1	.420**	.405**	-.195*	34.2126	7.68799
内的他者意識	.307**	.238**	.420**	1	.316**	0.084	20.1417	4.65939
外的他者意識	.414**	.325**	.405**	.316**	1	-0.086	10.9291	2.85129
社会規定的完全主義	-0.079	-0.039	-.195*	0.084	-0.086	1	10.1172	2.96866

**、相関係数は 1% 水準で有意（両側）。

*、相関係数は 5% 水準で有意（両側）。

体型不安に関しては、痩せ願望、他者からの否定的評価への恐れ、内的他者意識、外的他者意識と 1%水準で有意な相関関係が示されたが、社会規定的完全主義とは有意ではなかった。痩せ願望に関しても同様に、体型不安、他者からの否定的評価への恐れ、内的他者意識、外的他者意識と 1%と水準で有意な相関関係が示されたが、社会規定的完全主義とは有意ではなかった。他者からの否定的評価への恐れに関しては、体型不安、痩せ願望、内的他者意識、外的他者意識と 1%水準で有意な相関が示され、社会規定的完全主義とは

5%水準で有意な相関が示された。内的他者意識は、体型不安、痩せ願望、他者からの否定的評価への恐れ、外的他者意識と1%水準で有意な相関関係が示され、社会規定的完全主義は有意ではなかった。社会規定的完全主義は外的他者意識のみ5%水準で有意な相関関係が示され、その他の変数とは有意ではなかった。

次に、重回帰分析を行うにあたって、「女性であること」がどれほど結果に影響をもたらすのか検討するために、ダミー変数「女性ダミー」を作成した。分析の第1段階として、4要因を独立変数、体型不安を従属変数とし、女性ダミーを投入して重回帰分析を行い、結果を表4、表5に示した。

表4 4要因を独立変数、体型不安を従属変数とし、女性ダミーを投入した重回帰分析

モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
1	(定数)	14.503	4.076		3.558	0.001		
	他者からの否定的評価への恐れ	0.165	0.092	0.170	1.793	0.076	0.702	1.425
	内的他者意識	0.233	0.145	0.146	1.609	0.110	0.769	1.301
	外的他者意識	0.774	0.231	0.297	3.350	0.001	0.809	1.236
	社会規定的完全主義	-0.098	0.208	-0.039	-0.472	0.638	0.926	1.080
	女性ダミー	5.066	1.216	0.321	4.167	0.000	0.941	1.062
2	(定数)	14.607	3.826		3.818	0.000		
	他者からの否定的評価への恐れ	0.138	0.087	0.143	1.596	0.113	0.698	1.433
	内的他者意識	0.224	0.136	0.140	1.644	0.103	0.768	1.301
	外的他者意識	0.624	0.220	0.239	2.837	0.005	0.787	1.271
	社会規定的完全主義	-0.171	0.196	-0.068	-0.870	0.386	0.918	1.089
	女性ダミー	5.066	1.216	0.321	4.167	0.000	0.941	1.062

a. 従属変数 体型不安

表5 モデルの要約

R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
.482 ^a	0.233	0.207	6.65141
.574 ^b	0.330	0.302	6.24271

a. 予測値: (定数)、社会規定的完全主義、内的他者意識、外的他者意識、他者からの否定的評価への恐れ。

b. 予測値: (定数)、社会規定的完全主義、内的他者

モデル1では、調整済みR2値が.207を示した。外的他者意識は1%水準で有意であり、体型不安に影響を及ぼすことが明らかとなった ($p=.001$)。他者からの否定的評価への恐れは10%水準で有意な傾向が認められ、体型不安を強める傾向があることが示唆された ($p=.076$)。つぎにモデル2では、調整済みR2が.302を示し、女性のほうが男性とその他の性別と比較して有意に体型不安が強くなることが示唆された ($p=.000$)。前述の、他者か

らの否定的評価への恐れと外的他者意識の標準化係数 β については、女性ダミーの投入により低減したことから、この2要因による効果は女性という条件によって緩和されることが示された。なお、「VIFが2以上のときは多重共線性の高い変数がある」(村瀬洋一ら2007)が、モデル1、モデル2のいずれにおいても、すべての変数のVIFは2以下であったため、多重共線性は疑われなかった。ちなみに、内的他者意識と社会規定的完全主義は体型不安との関連は認められなかった。

第2段階として、4要因を独立変数、痩せ願望を従属変数とし、女性ダミーを投入して重回帰分析を行い、結果を表6、表7に示した。

表6 4要因を独立変数、痩せ願望を従属変数とし、女性ダミーを投入した重回帰分析

モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
1	(定数)	4.190	5.260		0.797	0.427		
	他者からの否定的評価への恐れ	0.149	0.119	0.126	1.251	0.213	0.702	1.425
	内的他者意識	0.214	0.187	0.110	1.144	0.255	0.769	1.301
	外的他者意識	0.757	0.298	0.238	2.540	0.012	0.809	1.236
	社会規定的完全主義	-0.014	0.269	-0.005	-0.052	0.959	0.926	1.080
2	(定数)	4.334	4.882		0.888	0.376		
	他者からの否定的評価への恐れ	0.112	0.111	0.095	1.009	0.315	0.698	1.433
	内的他者意識	0.201	0.174	0.103	1.156	0.250	0.768	1.301
	外的他者意識	0.549	0.281	0.173	1.957	0.053	0.787	1.271
	社会規定的完全主義	-0.114	0.250	-0.037	-0.456	0.649	0.918	1.089
	女性ダミー	7.019	1.552	0.365	4.524	0.000	0.941	1.062

a. 従属変数 痩せ願望

表7 モデルの要約

モデル	R	R ² 乗	調整済み R ² 乗	推定値の標準誤差
1	.371 ^a	0.138	0.109	8.58338
2	.513 ^b	0.263	0.233	7.96650

a. 予測値: (定数)、[%1; 社会規定的完全主義:

b. 予測値: (定数)、[%1; 社会規定的完全主義:

モデル1では、調整済みR²値は.109を示し、外的他者意識のみ5%水準で有意であり、痩せ願望に影響を及ぼすことが示された(p=.012)。しかし、外的他者意識を除く3要因と痩せ願望のあいだに有意な相関は認められなかった。このことから、3要因は直接的には痩せ願望に影響を及ぼさないことが明らかとなった。つぎに、モデル2では、調整済みR²は0.233を示し、女性は女性以外の性別と比較して有意に痩せ願望が強いことが示唆された(p=.000)。この結果は「男子学生に比べ女子学生は(中略) 痩身への顕著なこだ

わりが示されている」(菅原・馬場 1998)という先行研究を支持するものであった。外的他者意識に関しては、は女性ダミーの投入によって標準化係数 β が低減し、有意ではなくなったことから、外的他者意識による効果は女性という条件によって緩和されることが示された。

なお、VIFに関しては、すべての変数において2以下であり、多重共線性は疑われなかった。

第3段階として、4要因を独立変数、痩せ願望を従属変数とし、女性ダミーと体型不安を投入することで、どれほど説明量が増えるかを明らかにするために、重回帰分析を行った。結果を表8、表9に示した。

表8 4要因と体型不安を独立変数、痩せ願望を従属変数とし、女性ダミーを投入した重回帰分析

モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
1	(定数)	4.190	5.260		0.797	0.427		
	他者からの否定的評価への恐れ	0.149	0.119	0.126	1.251	0.213	0.702	1.425
	内的他者意識	0.214	0.187	0.110	1.144	0.255	0.769	1.301
	外的他者意識	0.757	0.298	0.238	2.540	0.012	0.809	1.236
	社会規定的完全主義	-0.014	0.269	-0.005	-0.052	0.959	0.926	1.080
2	(定数)	-7.195	4.406		-1.633	0.105		
	他者からの否定的評価への恐れ	0.019	0.096	0.016	0.199	0.843	0.684	1.463
	内的他者意識	0.031	0.151	0.016	0.205	0.838	0.752	1.329
	外的他者意識	0.150	0.248	0.047	0.603	0.548	0.740	1.351
	社会規定的完全主義	0.063	0.214	0.021	0.295	0.768	0.924	1.082
	体型不安	0.785	0.094	0.645	8.395	0.000	0.767	1.303
3	(定数)	-5.863	4.346		-1.349	0.180		
	他者からの否定的評価への恐れ	0.015	0.094	0.013	0.160	0.873	0.683	1.463
	内的他者意識	0.045	0.148	0.023	0.302	0.763	0.751	1.331
	外的他者意識	0.114	0.244	0.036	0.467	0.642	0.738	1.356
	社会規定的完全主義	0.005	0.211	0.002	0.023	0.981	0.913	1.096
	体型不安	0.698	0.098	0.573	7.128	0.000	0.670	1.492
	女性ダミー	3.482	1.395	0.181	2.496	0.014	0.822	1.216

a. 従属変数 痩せ願望

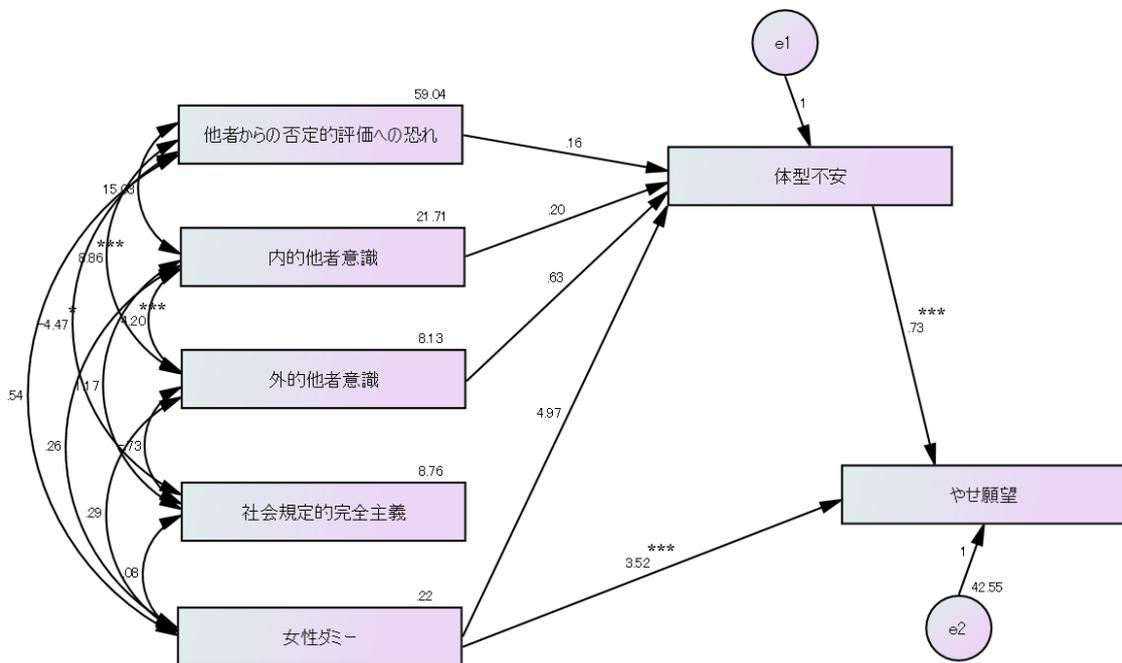
表9 モデルの要約

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
1	.371 ^a	0.138	0.109	8.58338
2	.676 ^b	0.457	0.434	6.84116
3	.696 ^c	0.484	0.458	6.69684

- a. 予測値: (定数)、社会規定的完全主義, 内的他者意識, 外的他者意識, 他者からの否定的評価への恐れ。
- b. b. 予測値: (定数)、社会規定的完全主義, 内的他者意識, 外的他者意識, 他者からの否定的評価への恐れ, 体型不安。
- c. 予測値: (定数)、社会規定的完全主義, 内的他者意識, 外的他者意識, 他者からの否定的評価への恐れ, 体型不安,

モデル1、2、3を比較すると、調整済みR2はモデル3が.458と最も高い値を示した。このことから、痩せ願望は体型不安によって有意に強くなり (p=.000)、女性に限定した場合、その傾向がさらに強まる (p=.014) ということが示唆された。なお、VIFに関しては、すべての変数において2以下であり、多重共線性は疑われなかった。

以上の3段階にわたる重回帰分析の結果から得られた、4要因と体型不安、痩せ願望の観測変数間の因果関係と、性差による結果の差異から、共分散構造分析によるモデル構築を行った。共分散構造分析にはAMOS Graphics Version24を使用し、その際に操作のため欠損値を削除して分析を行った。作成したモデルを図4に示した。



注)*なし…10%水準で有意な傾向あり。 *…5%水準で有意。 **…1%水準で有意。 ***…0.1%水準で有意。
注)値は標準化推定値。

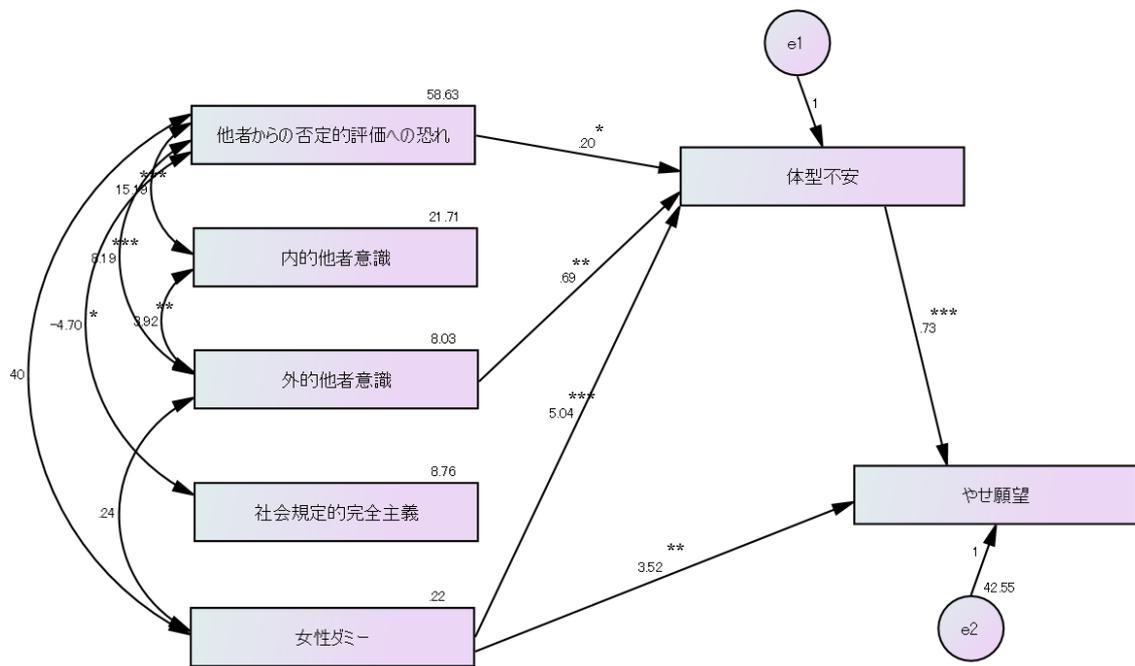
図4 有意でない矢印を削除する前の共分散構造分析のパス図

表 10 共分散

共分散：(グループ番号 1 - モデル番号 1)

			推定値	標準誤差	検定統計量	確率
他者からの否定的評価への恐れ	<-->	社会規定的完全主義	-4.467	2.073	-2.156	0.031
外的他者意識	<-->	内的他者意識	4.201	1.246	3.371	***
他者からの否定的評価への恐れ	<-->	外的他者意識	8.863	2.114	4.193	***
他者からの否定的評価への恐れ	<-->	内的他者意識	15.028	3.473	4.327	***
社会規定的完全主義	<-->	女性ダミー	0.082	0.125	0.656	0.512
外的他者意識	<-->	女性ダミー	0.286	0.123	2.325	0.02
内的他者意識	<-->	女性ダミー	0.262	0.198	1.324	0.186
他者からの否定的評価への恐れ	<-->	女性ダミー	0.54	0.328	1.648	0.099
外的他者意識	<-->	社会規定的完全主義	-0.732	0.757	-0.967	0.334
社会規定的完全主義	<-->	内的他者意識	1.171	1.238	0.946	0.344

表 10 は、パス図で設定した矢印の共分散である。このうち、女性ダミーと社会規定的完全主義、内的他者意識の有意確率は $p>0.1$ であり、有意であるとはいえなかった。また、女性ダミーと他者からの否定的評価への恐れの有義確率は $p<0.1$ であり、10%水準で有意な傾向が認められた。同様に、社会規定的完全主義と外的他者意識、内的他者意識の有意確率は $p>0.1$ であり、有意であるとはいえなかった。より当てはまりのよいモデルを構築するために、有意でない変数間の矢印を削除し、再分析を行った (図 5)。



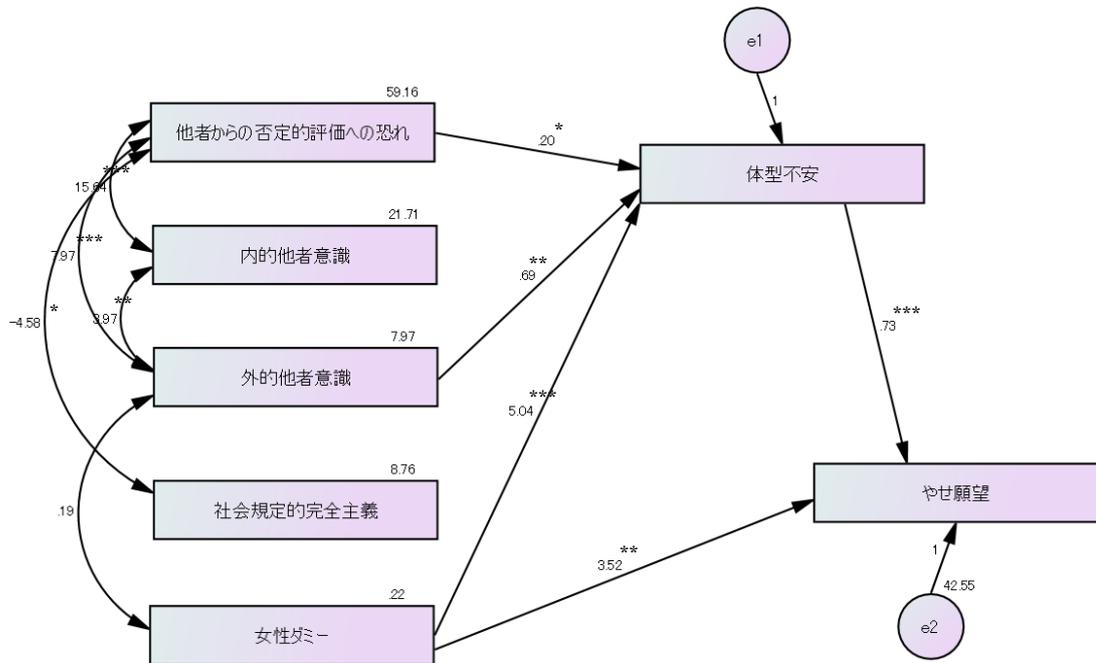
注)*なし…10%水準で有意な傾向あり。 *…5%水準で有意。 **…1%水準で有意。 ***…0.1%水準で有意。
注)値は標準化推定値。

図 5 10%水準で有意でない変数間の矢印を削除した共分散構造分析のパス図

表 11 共分散

共分散：(グループ番号 1 - モデル番号 1)						
			推定値	標準誤差	検定統計量	確率
他者からの否定的評価への恐れ	<-->	社会規定的完全主義	-4.702	1.8	-2.612	0.009
外的他者意識	<-->	内的他者意識	3.92	1.214	3.23	0.001
他者からの否定的評価への恐れ	<-->	外的他者意識	8.188	2.024	4.046	***
他者からの否定的評価への恐れ	<-->	内的他者意識	15.185	3.386	4.485	***
外的他者意識	<-->	女性ダミー	0.238	0.116	2.054	0.04
他者からの否定的評価への恐れ	<-->	女性ダミー	0.401	0.287	1.397	0.162

再び共分散の値に注目すると（表 11）、図 4 のモデルでは、他者からの否定的評価への恐れと女性ダミーの有意確率は $p=0.099$ で、10%水準で有意な傾向が認められていたが、図 5 のモデルでは有意確率 0.162 となり、有意でなくなりました。そのため、他者からの否定的評価への恐れと女性ダミー間の矢印を削除し、再分析を行った。最終的に得られたモデルを図 6 に示す。



注) *なし…10%水準で有意な傾向あり。 *…5%水準で有意。 **…1%水準で有意。 ***…0.1%水準で有意。
注)値は標準化推定値。

図 6 最終的に得られた共分散構造分析のパス図

表 12 CMIN

モデル	CMIN	自由度	確率	CMIN/DF
モデル番号 1	10.846	11	0.456	0.986
飽和モデル	0	0		
独立モデル	200.382	21	0	9.542

表 13 GFI、AGFI

モデル	GFI	AGFI
モデル番号 1	0.977	0.94
飽和モデル	1	
独立モデル	0.634	0.512

表 14 CFI

モデル	CFI
モデル番号 1	1
飽和モデル	1
独立モデル	0

表 15 RMSEA

モデル	RMSEA	LO 90	HI 90	PCLOSE
モデル番号 1	0	0	0.093	0.698
独立モデル	0.261	0.229	0.295	0

本モデルのデータへの適合度について、代表的な 5 つの指標を採り上げ、詳しく見ていく（表 12～15）。まず、CMIN の有意確率は.456 であり、豊田秀樹（2007）によると、CMIN は「構成されたパス図は正しい」を検定するために利用され、帰無仮説の立て方が通常とは逆となっているため、仮説が棄却されないほうがよいことになる。つまり、表示されている確率が高いほど、望ましい結果であると判断する。つぎに、GIF 値は.977 であり、GIF 値は一般的に 0.9 以上であれば「説明力のある（＝データと当てはまっている）パス図である」と判断される（豊田 2007）。同様の指標である AGFI 値、CFI 値はそれぞれ.94、1 であり、どちらも 1 に近いほどデータの当てはまりが良い、と判断される（豊田 2007）。RMSEA 値は 0 であり、0.05 以下であれば当てはまりが良く、0.1 以上であれば当てはまりが良くないと判断される（豊田 2007）。以上の適合度指標より、本モデルのデータへの当てはまりは非常に良いと判断した。

表 16 共分散

			推定値	標準誤差	検定統計量	確率
他者からの否定的評価への恐れ	<-->	社会規定的完全主義	-4.576	1.806	-2.533	0.011
外的他者意識	<-->	内的他者意識	3.973	1.217	3.264	0.001
他者からの否定的評価への恐れ	<-->	外的他者意識	7.973	2.013	3.961	***
他者からの否定的評価への恐れ	<-->	内的他者意識	15.64	3.437	4.55	***
外的他者意識	<-->	女性ダミー	0.194	0.11	1.756	0.079

つぎに、影響度係数については、女性ダミーと外的他者意識の影響度係数は 10%水準で有意な傾向があると認められ、その他のモデル内すべての影響度係数は、5%水準で有意であった。

表 17 非標準化推定値

係数：(グループ番号 1 - モデル番号 1)

			推定値	標準誤差	検定統計量	確率
体型不安	<--->	他者からの否定的評価への恐れ	0.198	0.077	2.569	0.01
体型不安	<--->	外的他者意識	0.69	0.213	3.244	0.001
体型不安	<--->	女性ダミー	5.035	1.185	4.249	***
痩せ願望	<--->	女性ダミー	3.52	1.329	2.649	0.008
痩せ願望	<--->	体型不安	0.729	0.086	8.502	***

表 17 は、図 3 のモデルの非標準化推定値の値である。体型不安に影響を与えるとされる、他者からの否定的評価への恐れに係数は.198、外的他者意識に係数は.69、女性ダミーに係数は 5.035 であった。女性ダミーの影響度係数が最も高く、女性であることは体型不安に強く影響することが本研究でも確認された。また、女性ダミーから痩せ願望への係数は 3.52 であり、強い影響力を持つものの、体型不安への影響度係数と比較すると弱い影響力であった。このことから、女性の多くは体型不安を抱きながらも、そのすべてが痩せ願

望だけでは説明しきれないということが示唆された。例を挙げるならば、高身長・低身長、頭の大きさ手足の長さなどのスタイルの良さ、筋肉のつき方など、痩せ願望以外の様々な要因が体型不安に包括された結果であると考えられる。

以上の分析結果から、本研究の結果をまとめると、「他者からの否定的評価への恐れ、外的他者意識の2要因が、体型不安を媒介して、痩せ願望を引き起こす」ことが実証された。また、外的他者意識に関しては性差が影響しており、女性ほど強い傾向にあることが明らかとなった。

6 おわりに

本研究では、強い痩せ願望を抱く女性の対人的な認知の特徴を明らかにすることを目的として研究調査を行った。田中・田山らの研究モデルを参考に、「女性において、他者からの否定的評価への恐れ、内的他者意識、外的他者意識、社会規定的完全主義が強いほど体型不安が強くなり、痩せ願望を引き起こす」という仮説を立て、質問紙調査および SPSS と AMOS 用いて調査・分析を行った。

仮説に対して、本研究で得られた結果は「他者からの否定的評価への恐れと外的他者意識が高いほど、体型不安が高くなり、痩せ願望を引き起こす」であり、一部ではあるが仮説を実証するものであった。他者からの否定的評価への恐れが体型不安に影響力をもっていたことは、2 者に恐怖心という共通性があり、恐怖心を抱きやすい人がその原因を自身の体型に帰属した場合に、体型不安が高められるのではないかと考えられる。外的他者意識が体型不安に影響力を持っていたことは、容姿など他者の外見に注目する傾向は、他者だけにとどまらず、自分自身の外見への注目・固執にもつながっていると考えられ、結果として体型不安が高まると考えられる。

社会規定的完全主義が体型不安に影響しなかった理由として、筆者は以下のように考える。社会規定的完全主義の質問項目は、「他者は、私が良い結果を出すのを当然だと思っている」、「他者から、私は常に良い結果を求められている」、「他者から、私は期待されている」、「他者から、私は完璧な人間だと思われている」「他者から、私はできないことがないと思われている」の 5 つである。この 5 つは、他者から完全性を求められている度合いを測ると同時に、対象者の自己評価の高さをも測ってしまっているように思われる。自己評価の低さは自尊感情の低さとして捉えることができる自尊感情の低さは痩せ願望との関連が報告されており、自尊感情の低いものほど痩せ願望が強くなるという（池田かよ子 2006）。すなわち、体型不安においても痩せ願望と同様に自尊感情の低さが関連している可能性があり、「自尊感情の低いものほど体型不安が高まる」という結果となったと考えられる。なお、体型不安と内的他者意識との関連が認められなかった点については、原因を明らかにすることができなかった。これについては、仮説立ての段階での慎重さが欠如していたためであり、今回の調査で反省すべき点である。

仮説のほかにも得られた結果としては、女性ダミーが直接体型不安および痩せ願望へ強く影響していたことである。したがって、今回想定されなかった異なる要因を媒介している可能性が示唆され、さらなる検討の必要性が感じられた。また、痩せ願望よりも体型不安のほうが女性ダミーの影響力が強かったことから、女性の体型不安には、痩せ願望だけではなく、より多様で複雑化しており、様々な要因が含まれているということがよみとれた。

さいごに、本研究の成果を述べる。女性の体型不安には他者からの否定的評価への恐れと外的他者意識が影響していることが明らかとなったことは、体型不安を抱く女性たちに対して、その傾向を和らげるためのヒントになったのではないだろうか。つまり、他者からの評価や他者の外見に必要以上に敏感にならないように、自分の意識をコントロールする訓練をし、自分の感情の軸を安定させることが、過度な体型不安に陥らない方法として有効なのではないだろうか、と筆者は考える。

謝辞

ご指導して下さった立木先生、授業の調整などして下さった秘書の隅垣さん、アンケート調査に協力して下さった方々すべてに感謝の言葉を述べさせていただきます。ありがとうございました。

[参考文献]

- American Psychiatric Association, 1994, *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 4th ed American Psychiatric Association*, Washington DC.
- Bennett, W. & J. Gurin, 1982, *The Dieter's Dilemma : Eating Less and Weighing* New York, Basic Books.
- Dominique Paquet, 1997, *Miroir, mon beau miroir Une histoire de la beauté*, Gallimard
(=1999, 木村恵一訳『美女の歴史』創元社.)
- Georges Vigarello, 2004, *Histoire de la beauté -Le corps et l'art d'embellir de la Renaissance à nos jours*, Paris, Édition du Seuil.
(=2012, 後平濤子訳『美人の歴史』, 藤原書店.)
- Gunstad J, Phillips KA, 2003, *Axis I comorbidity in body dysmorphic disorder*, *Compr Psychiatry* (44) :270-276.
- Hewitt, P. L. & Flett, G.L., 1991, *Perfectionism in the self and social contexts: Conceptualization, assessment, and association with psychopathology*. *Journal of Personality and Social Psychology*, (60):456-470.
- 半藤保・川嶋友子, 2009, 「女子大生の体型とやせ願望」『新潟青陵学会誌』1 (1) : 53 - 59.
- Hart, E. A., Leary, M. R. and Rejeski, W. J., 1989, *The measurement of social physique anxiety*, *J. Sport & Exer, Psychol* (11):94-104.
- 今井克己・増田隆・小宮秀一, 1994, 「青年期女子の体型誤認と“やせ志向”の実態」『栄養学雑誌』52 (2) : 75 - 82.
- 池田かよ子, 2006, 「思春期女子のやせ志向と情緒的サポート、体型および初潮との関係」『新潟青陵大学紀要』(6) : 55 - 67.
- 石垣亨, 2015, 「女性の痩せ願望の構造的現象」『教育医学』61 (2) : 180-197.
- 厚生労働省, 2014, 「平成 26 年国民健康・栄養調査結果の概要」厚生労働省ホームページ (2016年12月20日取得,
<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10904750-Kenkoukyoku-Gantaisa-kukenkouzoushinka/0000117311.pdf>)
- 勝野綾子・甲田道子・笹竹英穂, 2010, 「女子大生の痩せ願望に影響を与える要因について—栄養学専攻女子学生の場合—」『中京女子大学研究紀要』(44) : 53 - 60.
- 煙山千尋・清水安夫, 2009, 「大学生の perfectionism とメンタルヘルスとの関係 - 大学生版 Perfectionism Scale の作成及び集団適応効力感を媒介変数とした検討 -」『学校メンタルヘルス』12 (2) : 61 -70.
- Littleton HL, Axsom D, Pury CLS ,2005, *Development of the Body Image Concern inventory*. *Behaviour Research and Therapy*.(43):229-241.

- 村瀬洋一・高田洋・廣瀬毅士編, 2007, 『SPSSによる多変量解析』オーム社.
- 大谷佳子・桜井茂男, 1995, 「大学生における完全主義と抑うつ傾向および絶望感との関係」『心理学研究』66 (1) : 41 - 4.
- 笹川智子・金井嘉宏・村中泰子・鈴木伸一・嶋田洋徳・坂野雄二, 2004,
「他者からの否定的評価に対する社会的不安測定尺度(FNE)短縮版作成の試み :
項目反応理論による検討」『行動療法研究』30 (2) : 87-98.
- 菅原健介・馬場安希, 1998, 「現代青年の瘦身願望についての研究 - 男性と女性の瘦身願望の違い - 」『日本心理学会第 62 回大会発表論文集』.
- , ———, 2000, 「女子青年における瘦身願望についての研究」『教育心理学研究』48 (3) : 267-274.
- 田中勝則, 2012, 「大学生における身体不満足感と身体醜形懸念」『弘前大学教育学部紀要』(108) : 131-139.
- 田中勝則・田山淳, 2013, 「高い身体醜形懸念を有する大学生の対人的な認知の特徴」『カウンセリング研究』46 (4) : 189-196.
- 田中勝則・有村達之・田山淳, 2011, 「日本語版 Body Image Concern Inventory の作成」『心身医学』51 (2) : 162-169.
- 辻平治郎, 1993, 『自己意識と他者意識』北大路書房.
- 豊田秀樹編, 2007, 『共分散構造分析 [AMOS 編]』, 東京図書.
- Vandereycken W & van Deth R, 1994, *From Fasting Saints to Anorexic Girls-The History of Self-Starvation*; (=1997, 野上芳美『拒食の文化史』, 青土社).
- Bennett, W. & J. Gurin, 1982, *The Dieter's Dilemma : Eating Less and Weighing More* New York ,Basic Books.
- 山蔦圭輔, 2010, 「自己意識および痩せ願望と食行動異常との関連性」『女性心身医学』15 (2) : 221 - 227.